

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 190 回 犠牲から子供を救おう！日本の大人たち！！

2007.2.25

学校現場での問題が次々と露呈している。いじめを制止するどころか、そのきっかけを作りむしろ助長する教師、決められた必須科目を、自校の都合に合わせ、勝手に履修させない学校長、まずい事はすべて隠蔽しようとする教育委員会、一体、どうなっているのか！普通の常識すらない、極悪人の集まりのような「学校」にしてしまった彼らの責任は、大きなものがある。そんなところに、最愛のわが子を託し、ましては教育を期待するなんぞ、空恐ろしいことかもしれない。

こんなニュアンスの報道が、連日のようにテレビで流れ、いささか閉口気味だが、おおむね教師、校長、教育委員会等、学校批判に終始しているように思われる。

先日あるテレビを見ていて、驚いた。大学教授や教育評論家、キャスター達が好き勝手に批判を繰り返し、拳句の果てにすべては「成果主義が悪い」と結論付けた。学校や先生方の評価を数値で表し、その結果でライセンスするから、みんなごまかそうとしている。世の中なんでも成果主義、能率主義になるから、こんな問題が起こるのであり、諸悪の根源は「成果主義」であると、いかにも厚顔な、カメラ視線で言い切っていた。

なんとも稚拙な論旨のすり替え、見ていて馬鹿馬鹿しくなってきた。アホな先生と生徒・保護者から敬愛される先生が同じ評価でいいはずがない。それこそが、寧ろ公平・平等な評価という原点に基づいた「成果主義」であるならば、当然、成果主義を導入すべきである。実証を怠り、極論と仮定、空想と比喻だけで議論を展開するほど、馬鹿げた茶番であり、非科学的としか言いようがない。いじめを助長する先生は、明らかに本人がアホであり、成果主義とは何ら関係ない。隠蔽体質は、成果主義が叫ばれるずっと以前から、歴然と存在していた事実であろう。専門家といわれる科学者が議論するには、あまりに幼稚で、全く本質を見極めようとしていない。

教職者が尊敬に値する存在であった時代、もちろん成果主義はなかった。いや、正確に言えば「必要がなかった」といえよう。先生は当然の如く人格者であり、本人達も自覚とプライドがあった。社会的にも、すべての父兄からも尊敬されていた。そんな先生像がいつまで続いたのだろうか、今は多くの問題を内包する、単なるサラリー労働者に堕ちた。

その原因たるや、先生や教育委員会を責めるだけで解決するものではない。その背景には複雑な、多くの問題が重なり合っているように思えてくる。たった一人の我が子すら育めない親、自らの責任を棚に上げ、先生にばかり責任転嫁をするPTA、母子家庭・核家族化の進展による家庭教育・社会教育の崩壊、経済格差と少子高齢化の影響、片や教職の現場は、教員資格制度の安易さと疲弊、教育者としての労働組合の無責任体制と労働者意識の弊害、等々、決して短絡的で簡単な問題ではない。そしていつも、子供が犠牲になっている。大人が本気で、彼らのことを考えてやるデリカシーを、忘れてしまっている。